

発達障害児の小集団早期療育における幼児期の縦断的研究

○河野智佳子・富来秀美・山本聡子
(児童発達支援ふる一れ)

【目的】

ねりま発達クリニックでは、平成17年より、発達障害児の母子同室による療育グループを行ってきている。その後、平成23年7月に児童発達支援・ふる一れとして継続して、発達障害児に対しての療育を行ってきている。療育グループは、1歳半健診後から就園前までの母子一緒に療育グループと、就園後の母子分離の療育グループに分かれている。2008年・2010年の発表において、早期療育の効果について報告してきているが、7年間療育を行って来て、早期から療育を開始した子どもは、成長の中のさまざまな時点における発達課題の克服が、就園後の療育の利用開始など、母子一緒に療育を十分に利用することがなかった子どもに比べてスムーズに行えていることを、強い印象として得ることができた。そこで今回は、療育を行った子どもを様々な側面から縦断研究を行い、早期療育の効果について検証を試みた。

【対象・方法】

我々の療育は、医療機関等で広汎性発達障害、またはその疑いと診断され、紹介された子どもが通所している。早期に療育を開始した子どもは、2歳前から就学前まで療育を続けて利用する。一方、幼稚園・保育園に就園後（年少・年中児）で療育に通所するようになり、就学前まで利用する子どももいる。今回、その2つのタイプのグループを、早期療育グループ群（A群）と後期療育グループ群（B群）として分けて、発達（半年毎の発達検査の結果）・療育内での行動評価（着席行動、課題への取り組み行動、友達との関わり行動、指示の理解、実行）・所属する集団適応の様子・母子関係について、4歳時点から就学前の6歳までの2年間を縦断的に調査し、それぞれのグループでの違いを調査した。

【結果】

発達については、A群・B群ともに大きな差はなかった。むしろ、B群の方が就学前のIQは高い傾向があった。療育内での行動については、A群では、着席行動・課題への取り組み、指示の理解がよくできていることがわかった。B群においては、課題への取り組み、友達との関わりについて、行動に不安定さがあり、良い時とうまくいかないときの差が大きい。着席行動や指示の理解・実行については、良いという評価は少なかった。集団適応については、A群は、集団でのトラブルエピソードは少なく友達との関わりは協調的ではあるが、積極的に友達を求める傾向は少ない。B群は、友達との関わりを求めることが多く、トラブルが多い。母子関係については、A群は子どもの気持ちを待つ、できたことを評価する、子どもの様子をよく観察しているなどの評価が多い。一方B群は、困る、怒ってしまう、褒めることができないなどの評価がみられた。

【考察】

2歳からの母子療育を行ってきた場合、母親が早い時期から、子どもの行動や考え方の特性を自然に理解し、寄り添うということができるようになる。それは、その後集団に入って母親から離れて生活するようになって、気持ちの安定感につながり、集団の中で必要とされる、着席、注目、指示理解などの要素において優位に良い評価へとつながり、それは持続していくといえる。幼稚園・保育園就園前後以降に療育を開始した場合は、行動の問題だけに注目されて、気持ちを理解されたり支えもらう経験が少ないので、気持ちの安定がなかなか得られず、行動での問題が多く見られる。B群を縦断的に見ると、年齢とともに問題行動の発現が減り、母親からの寄り添いや支えは増えてくる傾向があることから、療育の効果はその後継続していくものと思われる。

また、大きな集団では馴染めなかったりトラブルを起こしてしまう発達障害児も、小グループの中では、先生との関係を結ぶことから始まり、そのつながりを軸にしながら周りの友達との関係を広げていくことができる。そこには、友達を意識する場面や遊びを段階的に設定し繰り返し経験することが必要である。その中で、トラブルの予見や回避、解決を体験することで、友達と関わりを持つことに対して自信を持てるようになるのではないと思われる。ただ、それが実際の所属集団の中でどのように発揮できているかは、今後経過をみていかなければならない課題である。